

職業専門性を通じた復興支援

あれは、もう15年も前の事。当時2011年、私はJC活動も終わって数年経ち、人生の時間のセグメントとして、本業である料理屋の仕事の割合を増やしていた頃の事である。日本料理業の二代目の会である「全国日本料理業芽生会連合会」の東北越ブロック（東北六県+新潟県）のブロック長（任期2年）を輪番で仰せつかった。自分は包丁を握れず、所謂マネジメントのみの仕事だが、同業の会に所属し交流を深め情報交換し見聞を広める事は、ダイレクトに仕事に役立つ解り易い活動だった。

その矢先の出来事である。2011年3月11日。東日本大震災の発災である。東北越エリア内の芽生会の会員は、太平洋側は皆被災者となった。当初はなかなか身動きも出来ない中ではあるものの、互いの安否確認も含め、情報交換だけはしっかりしていた記憶がある。

4月中、まだインフラも全然どうにもならない状態の中ではあるが、会議もあるので仙台芽生会の会長（前東北越ブロック長）の大観楼の遠藤慎一さんを見舞いがてら訪ねた（当時、全国芽生会連合会の全国大会が秋に仙台開催で決まっていた。これも何の因果か）。彼は、発災直後の状況をこと詳細に教えてくれた。電気や水道、ガス等のインフラが止まった事。勿論、店は開けられない事。数週間が経ち久しぶりに風呂に入った時のなんと嬉しかった事。これからどうなるのか不安である事、等々。その中でも、一際に声に力が入り、憤りながら話してくれた事があった。それは、どこからともなくやってきたヤカラの様な風体で、食料がない中で法外な値段で御握りや弁当を売っていた奴らがいたという事だ（非常時にはその人間性が表れるとは良く行ったものだ。足元を見て商売するなんて言語道断だ！）。彼は、料理を提供する料理屋として何もできず、指を咥えて見なくてはいけない状況を、口惜しきで涙ながらに語っていた事を、私は今も忘れられない。

当時、復興支援は様々な形で行われていた。現地の社会福祉協議会等が中心となってニーズ等の発信を行い、JC等全国ネットワークの団体が支援の仲立ちをし、全国から物心、労力含め多くの篤志が集まっていた。当米沢からも姉妹観光協会を通じ、石巻駅前では山形名物芋煮の炊き出しに行った。観光関係や料理屋が出来る事は限られているが、私も微力ながら配布要員として手伝いに行った。現地に行く途中、車のフロントガラスには、発行された「災害支援」の紙を掲げ、波打つ荒れた高速道路を進んで行った事を覚えている。仙台東道路には田んぼの真ん中に船舶があり、ここまで津波が来た事を教えてくれた。

炊き出しを行っている最中である。芋煮の配布に並んでいる被災者から、「吉澤さん？」と声を掛けられた。昔、JCと一緒に活動していた仲間だった。被災し何もかも失ってしまった事、こうして支援に来てくれた事、生きて再会した事、涙を目に浮かべて喜んでくれた（こちらは大した事をしてないのに）。日々日常の有難さを理解し噛み締めた。

全国日本料理業芽生会の全国ネットワークでも様々な動きがあった。日本を代表する名店中の名店が集まる京都芽生会が、「絆プロジェクト」と称し復興支援の

イベントを企画してくれた。名立たる老舗の名店がそれぞれの料理のパート（小鉢はどこ、焼物はどこ、煮物はどこか）を担当しコースを作り、京都市内で復興支援ディナーイベントを開催してくれた。名前を聞けばわかる料理屋のそれぞれの名物料理のコース料理である。後にも先にもこんな歴史的・文化的な行事は聞いた事がない（数年後に日本料理は「ユネスコの文化遺産」に認定されるからその集合体だと思って欲しい）。後日、京都芽生会はそのディナーイベントの収益金を東北に寄付をしてくれたのだ。有難い話だ。